



# 北方民族博物館だより

## No.140



D14.7 食材<タン茶> モンゴル/ウランバートル  
長さ36.5cm×幅18cm×高さ5cm 2002年収集

タン茶はチャノキ (*Camellia sinensis*) の葉を蒸し固めて作る緊圧茶<sup>きんあつちや</sup>の一種。レンガのような見た目から、モンゴル語で「チョローン・ツァイ (石の茶)」という。モンゴルでは一般的な茶であり、携帯性・保存性に優れるほか、ビタミン源としても重要である。飲用する際は、使う分だけ砕いて大鍋に沸かした湯に入れて煮出す。塩と乳を加えて飲むのがモンゴル流であるが、ときには穀類や肉を混ぜてスープのようにしても食べる。

写真のタン茶はモンゴルの首都ウランバートルのデパートで2002年に購入したもの。値段は1700トゥグルク (当時のレートで190～195円)。表面の印字から、旧グルジア・ソビエト社会主義共和国 (現ジョージア) で生産されたと考えられる。

### 目次 Contents

- 1 表紙 食材<タン茶>
- 2 講座「皮革文化財と科学技術」  
／ロビー展「オホーツクシリーズ⑩ 北の状景から」
- 3 ロビー展「イランカラフテ —アイヌ文化をウボボイから—」  
／講習会「樺太アイヌの匙エチペへを作ろう」
- 4 企画展「開館35周年記念収蔵資料展」
- 5 講座「北方民族博物館の収集資料」  
／ホリデーイベント「動物の毛皮に触ってみよう」
- 6 INFORMATION



## 講座

## 講座「皮革文化財と科学技術」

2025.12.7(日) 10:00-11:30

講師：田口智子氏（東京藝術大学 特任准教授）

：岡嶋克典氏（横浜国立大学 教授）

：飯岡稚佳子氏（東京藝術大学大学美術館 学芸研究員）

本講座はロビー展「皮革文化財と科学技術」の関連講座として開催いたしました。初めに田口智子氏から「皮革文化財の劣化と対策—保存科学の視点から」と題して、動物の革製品が、摩耗や紫外線、乾燥など様々な要因によって劣化することが報告されました。また、劣化した革製品の修復や保存方法の検証を行うために、人工的に革製品の劣化を再現する方法なども紹介されました。これらの研究は、東日本大震災により被災した（津波により海水を被った）資料を救うために始められたとのことです。

次に岡嶋克典氏が「文化財研究における情報工学の活用例」と題して講演を行いました。岡嶋氏はヒトの色の見え方について、脳の仕組みから解説をした後、スペインの美術品の色を現物に忠実に再現するための撮影方法などについての説明を行いました。

最後に飯岡稚佳子氏より「AIの画像認識技術を用いた皮革文化財の研究内容について」の解説がなされました。飯岡氏は皮革文化財の調査方法について、博物館資料においては非破壊での調査が求められることや、既存の方法では顕微鏡写真によるものが主流のため、動物種の判別などは個人の経験に頼らざるを得ないことなどを説明されました。これらの調査にAIによる画像認識技術を用いることで、誰でも種の判別が可能になることや、ヒトの目では判別できない模様の特徴などを捉えられるようになることが期待されるとのことでした。動物による毛穴のパターンの特徴など普段はなかなか触れることのない情報もあり、大変刺激になりました。

(学芸グループ 日下稜)



左から田口智子氏、岡嶋克典氏、飯岡稚佳子氏

## ロビー展

## オホーツクシリーズ⑱ 北の状景から

2026.1.4(日) ~ 1.18(日)

オホーツク地域の文化的活動を紹介・発信する展示イベント「オホーツクシリーズ」の第19回目として、この時期恒例の写真展「北の状景から」を開催しました。本ロビー展では、オホーツク地域で撮影されたアマチュア・カメラマンの写真作品を展示してきました。今回は、山田丈司様、長谷川祐太様（北見市地域おこし協力隊）、東京農業大学北海道オホーツクキャンパス写真サークル様（マークくん、Sealちゃん、叡、那須湘太朗）より、計38点の写真を出展いただきました。

今年で三度目の出展となる山田様は、前回までと同様、網走市内の風景写真がメインでした。動画撮影した画像をフィルムカメラのような画質に加工し、さらに16:9の横長の比率で印刷するというこだわりにより、普段から見慣れた景色のはずが、どこか懐かしさを感じるような仕上がりになっていました。

今回初めて参加いただいた北見市地域おこし協力隊の長谷川様には、渾身の動物写真11点を展覧いただきました。オオワシやキタキツネ、アザラシやイトウなど、北海道ならびにオホーツク地区を代表する動物たちの生き生きとした様子が見事に捉えられており、北海道の自然の豊かさがとてもよく伝わる作品群でした。

同じく今回初の参加となった東京農大オホーツクキャンパス写真サークル様（4名）からは、網走近郊の風景写真や生物の写真を出展いただきました。網走市北部に位置する能取岬灯台を撮影した作品が複数見られたことから、当地が市内でも屈指の「映え」スポットなのではないかと予想されました。

年明けの恒例行事となっているオホーツクシリーズも来年で20周年を迎えます。当館では常時出展者を募集しておりますので、関心のある方はいつでもご連絡ください。

(学芸グループ 佐藤重吾)



撮影：長谷川祐太（北見市とん田東町にて）

## ロビー展

## イランカラプテ —アイヌ文化をウポポイから—

2026.1.4(日) ~ 1.18(日)

北海道白老町にある民族共生象徴空間（ウポポイ）の工房スタッフが制作した工芸品の展示を通してアイヌ文化の発信を行うことを目的として、ロビー展を行いました。本展示は、公益財団法人アイヌ民族文化財団が、2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）で行った展示を再構成したものです。

マキリ（小刀）、イタ（盆）、エチペへ（樺太アイヌの匙<sup>さじ</sup>）、トゥムシコップサイ（箸<sup>はし</sup>）などの木工品から、アットウシ（樹皮繊維の衣服）、カバラミブ（木綿地に白布を貼り付け刺繍した衣服）などの衣類、イクパスイ（祭具）やサパンベ（冠状の被り物）など祭事に使う道具、ク（弓）、アイ（矢）などの狩猟道具、イタオマチブ（丸木舟、1/10模型）、ニンカリ（耳飾り）やタマサイ（首飾り）まで様々なアイヌの工芸品29点を展示しました。

トゥムシコップサイの「トゥムシ」とはアイヌの木彫りの技法で、鎖彫りとも呼ばれます。1本の木材から鎖のように切り出します。このトゥムシコップサイをはじめとして、本展示の木工品の多くは、関連講座「樺太アイヌの匙エチペへを作ろう」で講師を務めていただいたアイヌ民族文化財団の山道陽輪氏により製作されたものです。

また、丸木舟の製造過程を記録した映像を上映した他、パネル展示として、ウポポイの施設紹介や、様々な工芸品を製作している職員の方々のメッセージを掲示しました。2016年に当館の講座でも講師を務められた山田美郷氏のパネルには、「私が作るものの多くは、着る人がわかっている一点ものですから、それを気に入って長く着てもらおうことが、いちばんの喜びです。」とのメッセージが綴られていました。今回の展示は2週間と短い期間でしたが、今後もアイヌの工芸品を紹介したり、制作者の思いを伝えられる機会を作りたいと思っています。

（学芸グループ 日下稜）



トゥムシコップサイ（鎖彫り付きの箸<sup>はし</sup>）

## 講習会

## アイヌ文化講習会 「樺太アイヌの匙<sup>さじ</sup>エチペへを作ろう」

2026.1.18(日) 13:30-15:30

講師：山道陽輪氏（アイヌ民族文化財団）

岡田恵介氏（アイヌ民族文化財団）

2026年1月4日から18日にかけて当館ロビーで行われた公益財団法人アイヌ民族文化財団の出張展「イランカラプテ—アイヌ文化をウポポイから—」の最終日に、山道陽輪氏と岡田恵介氏を講師としてお招きし、樺太アイヌの匙「エチペへ」を作る講習会を行いました。

講習会は、山道氏による匙の概説から始まりました。山道氏によれば、樺太と北海道では匙を意味するアイヌ語名称や材質、装飾の仕方に違いがあります。樺太で用いられたエチペへはシラカバやナナカマドを材として匙本体の装飾はシンプルなものが多かった一方、北海道で用いられたペラパスイ（パラパスイとも）はノリウツギやクルミを材として表面に文様が施され、鎖彫りが付随するものが多かったそうです。

製作工程の確認が終わり、いよいよカツラの小板から彫刻刀で匙を削り出す段階になると、参加した皆さんは集中して作業に取り組んでいました。一定の薄さで少しずつ削り出していくことに苦戦している方も居りましたが、皆さん徐々に彫刻刀の扱いに慣れていったようでした。

あらかじめ引かれた線に沿って匙の大まかな形を仕上げた後、講師により不要な部分をのこぎりで落としてもらい、さらに匙の湾曲した部分などの細かい部分を削り上げていきました。匙のかたちが完成すると、粗さの違う二種類の紙やすりで表面を滑らかにし、さらに乾燥防止のクルミ油を適量塗って完成です。早く終わった参加者は、匙の取っ手に思い思いの文様を刻むなど、オリジナリティの高い作品を作っていました。講習会の最後には、講師が用意してくれた特製プリンを自分たちで作った匙を使って食べました。世界に一つだけのエチペへで食べるプリンの味は、思い出に残る格別なものとなりました。

（学芸グループ 佐藤重吾）



皆さん集中して木を削っていました

## 企画展

# 開館35周年記念収蔵資料展

2026.1.31(土) ~ 4.5(日)

「時間と空間を超えてきた資料が 北の文化を話しはじめる」

これは当館の常設展示室入口に掲げた句で、当館が収蔵資料を通じて文化を紹介する姿勢を示しています。今回の企画展は開館35周年を記念し、この句をテーマとして当館のこれまでの収集活動と収蔵資料に焦点をあてることとしました。

北海道立北方民族博物館は、平成3(1991)年2月10日に開館しました。当館では、開館前から現在に至るまで、北方の諸民族に関する資料の収集に継続して取り組んできました。民族資料、考古資料、映像資料などから成るこれらの収蔵資料は、当館の活動の中核をなすものであり、展示、調査研究、教育普及といったさまざまな活動の基盤となっています。当館の収集活動は、現地の方々をはじめ、研究者や関係機関など、多くの方々の理解と支援があって可能になったものです。

北方諸民族の文化を総合的に扱っていることが、当館の大きな特徴です。収蔵資料の中には、国内では当館でしか出会うことのできない資料も数多く含まれています。衣食住、狩猟や漁撈の技術、自然との関わり方、信仰や世界観といった精神文化、さらには言語に至るまで、北方の諸民族が育んできた文化は多様です。こうした文化の多くは、近代化や社会構造の変化、政治的・経済的影響の中で、大きな変容を余儀なくされてきました。一方で、暮らしの根幹に関わる価値観や知恵、自然と向き合う姿勢、技術の一部は、形を変えながらも現在まで受け継がれており、当館では収集した資料を通じてそれらを紹介しています。

当館の資料収集は、開館準備段階から始まっていました。開館にあたっては、網走市から北海道アイヌ、サハリンアイヌ、ニブフ、ウイльтаを中心とした民族資料に加えオホーツク文化に関する考古資料の寄贈を受けました。これらの資料は、地域に根ざした長年の調査や研究の成果であり、当館の収蔵資料の礎を成しています。これを契機として、当館では資料を民族資料と考古資料の二つに大別して管理・整理する体制を整えてきました。網走市からの寄贈資料には、外国人研究者による現地調査が可能になったばかりだった旧ソ連・アムール流域で収集された資料も含まれています。当館ではアムール流域の資料を現在約600点所蔵しています。再びロシア地域での現地調査が困難な状況となるなか、これらの資料は、当館の開館からの歩みがこうした地域で調査・収集活動が可能だった時期と重なっていたことを示しています。

また、平成元(1989)年度には、北海道教育委員会による北方民族博物館開館準備事業の一環として、当時の学芸

員が北米および北欧に派遣され、資料調査と収集が行われました。北米ではエスキモー／イヌイトやカナダ先住民に関する資料が、北欧ではサミの資料が対象となりました。この時に収集したものが常設展示の主な構成資料となりました。

考古学分野において、当館はこれまでに、川西オホーツク遺跡(湧別町)、美岬遺跡、能取西岸遺跡(網走市)等で発掘調査を行ってきました。これらの遺跡から出土した遺物も保管しており、これまでに調査報告書を3冊発行しています。さらに当館では、開館以来、映像資料の収集にも力を入れてきました。現在では約470タイトルにおよぶ映像資料を所蔵しており、北方諸民族の暮らしや生業、祭礼、技術、言語などを記録したアーカイブとなっています。常設展示ではこうした映像をテーマごとに再編集して紹介しています。また一部については館内の情報普及室で視聴することができるほか、定期的に学芸員の解説付きで上映しています。

このほか、閉館した博物館等から引き継いだ資料群があります。弥永北海道博物館(札幌市)からのサミの資料、アマゾン民族館(山形県鶴岡市)からの北欧、ロシア・アムール流域、北海道アイヌ等に関する資料、北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニ(網走市)からのウイльтаやサハリンアイヌの資料を収蔵しています。

また、北方文化研究に携わった研究者の旧蔵書も多数受け入れており、文化人類学や言語学、考古学などの分野における貴重な文献が集まっています。さらに、特定の寄贈者やテーマごとに構成されたコレクション等の多彩な資料群が当館の活動を支えています。

展示では収集の歩みについて紹介するとともに、現地や資料をよく知る当館研究協力員のみなさまに、展示資料の選定と解説執筆に協力していただきました。いつもよりずいぶん長文となっていましたが、アンケートでは大変好評です。

当館では今後も、資料の収集・保存・調査・公開を通して、北方諸民族文化の豊かさとその意義を広く発信し、多様な文化を紹介する安全な場としてあり続けたいと考えています。  
(学芸グループ 笹倉いる美)



展示室の様子

## 講座

## 北方民族博物館の収蔵資料

2026.1.31 (土) 10:00-11:30

企画展「開館35周年記念収蔵資料展」の関連事業として、北方民族博物館の収蔵資料について紹介する解説講座を開催しました。講座では、当館の収集の歩みや収集方針、具体的な収集方法、主だったコレクション、資料のデジタル化の取り組みについて紹介しました。

当館では資料収集評価委員会を設け、資料収集方針に基づいて、毎年協議いただいています。実際の収集時には現地との緊密なやりとりや、ワシントン条約をはじめとする各種法令の順守等が必要であることにふれました。

資料の収集方法は、購入、寄贈が中心で他に発掘、採集、制作があります。レプリカ制作は歴史系博物館としては少ないといえるでしょう。現時点での寄贈者が170名以上にもなることから、当館の資料収集活動が多くの方に支えられてきたことがわかります。

収集した資料は展示で紹介するほか、これまで発行してきた20冊の収蔵資料目録を通じて公開してきました。現在デジタル化して公開する準備を進めています。その際の懸案事項のひとつは著作権処理になります。しかし当館の収蔵資料のなかには制作者が不明のものも少なくありません。今回の企画展において、三重大学の立川陽仁教授には、カナダ北西海岸先住民のクワクワカワクウ（クワキウトル）の仮面について執筆いただきました。立川教授の調査過程で、これまでは不明だった、制作者や制作の経緯、当館に収蔵されるまでの経緯までもが判明することになりました。制作はビル＝ヘンダーソン氏です。1980年代に彼の娘を弔うポトラッチ（儀式）で使われ、その後カナダのビクトリア市の美術商に譲られたそうです。ヘンダーソン氏からは今回、今後データベース等でデジタル化して紹介することの許諾を得ることもできました。

講座のあとには企画展会場へ移動いただきました。一つ一つの収蔵資料にそれぞれ収集のストーリーがあることを知ることで、より関心をもって観覧いただけたようです。

(学芸グループ 笹倉いる美)



クワクワカワクウの仮面  
(ビル＝ヘンダーソン作)  
撮影：城野誠治

## ホリデーイベント

## 動物の毛皮に触ってみよう

－アイヌ民族と北方先住民族の毛皮利用を知る・触る－

2026.2.22(日)、2.23(月・祝) 10:00-15:00

会場：国立アイヌ民族博物館1階交流室

共催：国立アイヌ民族博物館

協力：北極域研究強化プロジェクト (ArCS 3)

沿岸コミュニティ課題

北に暮らす人びとにとって欠かせない素材である毛皮について広く知ってもらうことを目的として、本イベントを実施しました。日本では既に、動物の毛皮を使用した衣服は珍しいものになっていますが、より寒い地域に暮らす人びとにとって、毛皮はなくてはならない素材の一つです。科学技術が進歩した現在でも、極寒の地で使用する衣服は毛皮製が最上級であることに変わりありません。

本イベントでは、世界の北方地域で使用されている毛皮と毛皮製品の展示の他、アザラシ猟やテン獲りわなの体験、狩猟に関する映像の上映を行いました。

毛皮展示では、北海道、フィンランド、カナダ、モンゴル、グリーンランドなどで収集した約30種の動物の毛皮、約50点を展示し、自由に触ってもらうことで動物毎に異なる毛皮の質感や、地域・民族による利用方法の違いを体感してもらいました。毛皮は5つテーマに分類し、それぞれ「ヒグマやエゾシカ、エゾタヌキなどアイヌに関係する動物」、「クロテン、キツネなど交易に利用される動物」、「トナカイなどのシカ類」、「アザラシなど海棲哺乳類」、「オオカミ、コヨーテなどイヌ科の動物とツキノワグマ」を配置しました。アイヌに関する動物のコーナーには、昨年に引き続き、ウポポイ職員・川上将史さんの「グルメレポート」を配置し、クマやアザラシなど毛皮になる動物達の「味」についても興味を持ってもらえるようにしました。

今回で5回目を迎える本イベントには、2日間で合計773名の来場がありました。来場者の中には、年に1回「このイベントを楽しみにしている」とおっしゃる方もおり、非常に励みになりました。

(学芸グループ 日下稜)



毛皮の展示会場

**ロビー展「Innovate MUSEUM 事業成果写真展  
文化財写真の可能性」**

当館は文化庁の令和7年度 Innovate MUSEUM 事業の博物館収蔵資料デジタルアーカイブ推進事業において中核館となり、オホーツクミュージアムえさし、士別市立博物館、釧路市立美術館、東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設の計4館の収蔵資料のデジタル化に取り組みました。本展ではその成果を写真展として紹介します。

**会期**：2026年4月25日(土)～5月17日(日)

**会場**：北海道立北方民族博物館・ロビー

**観覧料**：無料

**「北海道立北方民族博物館研究紀要」第35号 目次**

〈論文〉

・服部文庫公開シリーズ 12

Takeshi Hattori's Nivkh materials re-evaluated from a phonological and morphological perspective: An analysis of two South Sakhalin Nivkh Folktales (Martijn Knapen)

・北米北西海岸における銅板と「骨からの再生」：18～19世紀における威信財の価値と変容（野口泰弥）

〈研究ノート〉

・《写真100年—日本人による写真表現の歴史展—》(1968年)による「北海道写真」の成立（中村絵美）

・トナカイ遊牧民コリヤークの食料・飲料への植物利用に関するレポート（呉人恵・佐藤重吾）

〈調査報告〉

・樺太アイヌ語タライカ方言のウチャシクマ 1篇（村崎恭子）

・モンゴル国のトナカイ牧畜民における環境変化と生業に関する認識について（中田篤・西村幹也）

〈資料紹介〉

・服部文庫公開シリーズ 13

北海道立北方民族博物館収蔵の服部文庫資料に含まれる植物標本群の同定（首藤光太郎）

・近世末期のアイヌ語辞書～番人円吉蝦夷記（宮川啄）

・のりすくと2025—北方研究データベース—（笹倉いる美）

**INFORMATION**

**行事報告**

**イベントなど**

◆12月18日(木)、ロビーコンサート2025「青少年のための室内楽の夕べ」が開催されました。今年札幌交響楽団から赤間さゆらさん、龍田香菜美さん（以上二名ヴァイオリン）、鈴木勇人さん（ヴィオラ）、石川祐支さん（チェロ）のカルテットにお越しいただきました。



コンサートの様子

◆1月10日(土)、講習会「はじめての歩くスキーツアー」（講師：中田篤主任学芸員、網走スキー協会会員）を開催しました。初めに北方民族のスキーについて紹介したのち、実際に歩くスキーを体験しました。



上手に滑れました！

◆2月11日(水・祝)、「第36回北方民族博物館開館記念感謝DAY」が催されました。恒例となっているおしるこの無料配布やオリジナルマグネットづくり、かんじき体験を今年も実施しました。



大盛況のマグネットづくり

**はくぶつかんクラブ**

◆12月13日(土)、はくぶつかんクラブ「皮とフェルトでつくるカレンダー」（講師：菅原章子解説員）を開催しました。

◆1月17日(土)、はくぶつかんクラブ「ビーズ織りでつくるルームプレート」（講師：平栗美紅解説員）を開催しました。



うまくできました！

◆2月21日(土)、はくぶつかんクラブ「北の動物ししゅうのティッシュケース」（講師：石原生久代解説員）を開催しました。



すてきな作品に仕上がりました

**学芸員実務実習**

◆1月27(火)～2月1日(日)、2025年度の北海道立北方民族博物館学芸員実務実習として4名の実習生を受け入れました。

**北方民族博物館だより  
No.140**

令和8年(2026年)3月20日発行

編集・発行 北海道立北方民族博物館

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1

Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889

e-mail: tonakai@hoppohm.org

<https://hoppohm.org>

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会